

日本書紀傳 廿二卷四

和書
一〇五二號

廿二卷

内一三六八三號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156	(78)
函號	特	85 1



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教部省
文庫印

内閣
文庫

皇
文庫

太玉命の御名を舉て相與致其祈禱焉と有り係り
 乃以御手細開磐戸窺之と有る是即文の經より其
 其御祈禱を感けさせ御在り坐けるより天鈿女命
 の事ハ又字を思ひて書さるる水ハ其ハ文の緯ある
 して祢辞と神樂と二共々感させ給へ水ハ何れも其
 勝劣有る非れども其主に成りて爲る事に副は成
 て爲る許の差異ハ有る事あるは正書と此とを別ふ
 る者ハ見る可うすあるむ有ける然水ハ此の上
 其の下又様々君遠祖天鈿女命則乎持茅纏之稍立
 於天石室之前巧作能優云々の文を以加へて見
 るむあり上下の趣相貫りて目易く心得る可事
 なるむ有ける能く相互して照し應せて覽めよ

○日本書紀傳二十二

○百七十一

内一二六八三號

〇天手力雄神ハ正書ニ所出タル共ニ手力雄神
 〇有テ此神ノ御事傳十九百九十二丁ニ註シ奉ル
 を此ノ其出自を顯ハシ奉ル可ク備此神ハ四
 神出生章第七ニ書ニ出タル雷神亦名天雷命ノ御子
 〇御在シ坐テ亦名を湯豆波和氣神トモ大國栖御魂
 神トモ多久豆玉命トモ申奉ル由來已ニ傳十一
 一ニ註シ又上八十三丁ニ其子天日鷲命ノ系脈ノ事
 就テ云ルガ如ク然ルニ尊卑分脈ニ收ルニ紹運録ニ
 月讀命其男手力雄命其男生馬武見命ト有テ其手力
 雄命ノ弟嶋根見命ト系を立テ又其異本神系圖ニ

〇月讀命其男手力雄命弟嶋根見命其男生馬武見命
 〇有テ此ノ生馬武見命を嶋根見命ノ子ト為テ
 又一本神系圖與本朝武家大系圖大同小異ニ月弓尊嶋根見命ト有
 テ此ノ手力雄命ノ御名を載セテ又神代系圖傳ニ
 月讀尊其男嶋根見命弟手力雄命其男生馬武見命弟
 片倉邊命ト有テ何れモ大同小異ナルト雖モ其擬を
 詳ニ為シ信ニ難ク其辨ハ次ニ云ベシ右ノ異本神系
 圖ハ東武ノ儒官林氏校本ナリ又一本神系圖共ニ讀
 政國高招タル考信箇ノ藏本タルを小泉康敬ガ寫持
 〇るを抄出タルアリ何れモ手力雄命を月讀尊ノ御
 子ト申テ事ハ更ニ然ル有テ事ナレドモ今思ヒ

二郡家東北一十九里百八十步

出云任之書著其嶋根見命生馬武見命共出雲國
嶋根郡之悉く由有之其風土記之千酌郷伊佐奈枳
命御子都久豆美命此處坐然則可謂都久豆美而今
人猶千酌號車之有之此都久豆美命之已傳八
論定たるが如く月讀尊は御在坐山其御子
嶋根見命云神坐云一説ハ出來たりし者
風土記之所以號嶋根者因引坐八束水臣津野命之
詔而負給名故云嶋根之有之此地之因以之
可之其八束水臣津野命即素戔嗚尊亦御名
月讀尊と同神は渡り世給ふ所由其傳十五
百

下云之如く水ハ更ニ由無し云々又
其生馬武見命ハ同郡生馬郷神魂命御子八尋鋒長依
日子命詔吾御子平明不憤詔故云生馬之有之八尋
鋒長依日子命ハ其子力雄命嶋根見命ハ神之内傳
事思ひけれ此之生馬武見命ハ南
水其亦名之若く此子力雄命を多久豆玉命と
申せ之事上云々如く同郡未入官帳社之多
久社見え多久久川原出郡家西北廿四里小倉山下
其楠縫郡神名極山之下古老傳云阿遲須枳高日
子命之后天御梶日女命來坐多久村産給多伎都比古
命云々所見たり其神ハ子力雄神ハ神女所波神ハ

御事ヲ御在シ坐ス事傳十一四十七云云カ如シ此
手ノ雄命ヲ天石門別家國玉主神ト申シ天孫降臨
章ニ謂ヒ天國玉神ニ御在シ坐テ天稚彥ニ天御
梶日女命ニ其父ト坐テ故ニ味耜高彥根神ト天稚
彥ト友善シ事此ニ出ル又風土記仁多郡三
津郷ノ下ニ大神大穴持命御子阿遲須杵高日子命御
須髮八握子生晝夜哭坐之辭不通云云事有シ
垂仁天皇二十三年御紀ニ譽津別王是生年既三十鬢
鬚八掬猶泣如兒常不言ト見ル其ヲ古事記ニ尔崇
出雲大神之御心故其御子令拜其大神ト有シ合セテ

尾張風土記ニ丹羽郡吾縵郷品津別皇子生七歲而不
語皇后夢有シ神告曰吾多具國之神名曰阿麻乃弥加都
比女吾未得祝若為吾亮祝人皇子能言亦是壽考ト有
テ多具國ハ右ノ多久社多久川ノ地ニ云云阿麻乃弥
加都比女ハ味耜高彥根神ノ后神天御梶日女命ト御
在シ坐ス事愈以テ知ル若此ク其故由リ寔
ニ相協リ月讀尊ノ御子ト申ス證ハ少ク
也無ク却リ八尋鋒長依日子命ヲ神魂命御子ト有
ル事姓氏錄ニ此手ノ雄神ノ出自ヲ書セ相
等シ月讀尊ノ御子ト證ハ有ル然レ古

の八尋鋒長依日子命と申す、天上よりの御名にて
島根見命と、其島根郡に天降るに御在り坐して住せ
るに、御名なるを右に引く如く、其島根と云ふ
郡名、八束水臣津野命の御言に、出たる地名を取て
御名と為るに、其兄と坐す、手力雄命を合せて
月讀尊の御子と云成りたる、一の傳に、出来水に青
あり、引上り、津島記事に、按本朝有下始、島
根見命灼鹿肩骨以下、此名太古と有、何日、撰て云
郡、古書に、見えざる事あり、神名式に、對馬島上縣
に、多頭多麻と有り、此より、手力雄命なる事知る
るに、水太白事あり、由有げざる事あり、備又
右の天御梶日女命も、穀を殖給へる御功に依り、本
て、御父多頭多麻命も、其穀を生し給へる御名なる本
綿を採り、穀と云ふ事、百六丁に云ふを見、心し、又
其八尋鋒長依日子命と申す、八尋鋒、禊語にて、長依
の長緑と、南由穀を長く緑少て織る可く、科と為る
る可し、多頭多麻の地名も、思合す可く、右の尾張の吾漫
郷の故由、木綿鬘る可く、皆各其本一なる者あり、
けり、此の別なる事を云ふ如く、多水と云ふ、手力雄神の

神の出自を知り、先此事より明くめず、得有ぬ
事なれば、力を入て讀味ふ可き者あり、猶又次云ふを
も深く考へ、又此手力雄神を思兼神の御子ありと云ふ
合す可し、一説有、神皇正統記及天地人惣系圖に見えたり、然れ
ども、上五十一、註に、如く此神の御名許登能麻遲媛命
の興、台産靈神の後神に御在り坐して、其御子天兒屋命
即思兼神に坐せば、手力雄神の其外祖父の御在り坐
し、又其思兼神の後神、枳幡千二姫命の出自を古語拾
遺に、枳幡千二姫命、天忍日命、天太玉命を、高皇産靈神
と為るに、誤ふ水と云ふ、天忍日命、即手力雄神の御子と
す、件の三柱の同胞として、共此手力雄神より出給

八見元々隱社記
 孝元天皇御宇天
 皇命天降神兒于
 水内郡之隱山親立
 吾道宮入宮鎮
 座曰隱山戸隱
 者何云杜首手力
 雄命引路天岩
 戸投下其兩座
 瑞穂國即化爲
 山今戸隱山因
 之号之と有ハ
 思金神ハ

へる事決け此ハ手力雄神ハ其思兼神ハ為リ外舅
 とも云渡り世給へりける傳十九四百八註云ガ
 如く信濃國水内郡戸隱神社ハ此磐戸を抛落し給へ
 る地より其時より御靈の鎮坐す地より然るに信濃
 地名考々云物々孝元天皇五年天八意命神兒將手力
 雄命天降信乃國吾道宮鎮座手力雄命 戸隱山遷座
 之者ハ伊那郡所智神社伊那郡所智神社ハ雄命ハ戸隱山ハ坐す由を書せるあり可
 さハ戸隱山ハ鎮座を孝靈天皇五年と云ひ手力雄神
 を八意命兒と云ふ心行ぬ事は戸隱山を此手力
 雄命と云ハ寔ニ然る言より傳十九二百六上八十下二十六

山安佐太川祢下志毛
 山安佐太川祢下志毛
 山安佐太川祢下志毛

云々此神ハ御子天日鷲神ハ作木綿者ニ瑞在し坐す
 合せり又其國ハ由有る事共ハ先和名抄ハ國名信
 濃之奈 郡名ハ更級佐良 埴科波奈 郷名ハ更級郡更
 級之奈 高井郡穂科保之奈 埴科郡倉科久良 多科シテ云
 地名多在る其科ハ穀ハ一種楮ハ事より即木綿ハ事
 あり神樂歌木綿作ハ由不川久留志名乃波良仁也安
 佐太川祢安佐多川祢也中安佐太川祢吉美毛可美所
 万志毛可見所幾美毛可見所末之毛可美所幾美毛可
 美所也下略々有る由不川久留ハ志名乃波語より科を
 以て作る謂より安佐ハ其麻ハ細く為れるを云ふ也

七可美所君も可美所其紙麻を木綿鬘りし相互
ひは掛る事を君も神ぞや汝も神ぞや其神樂の庭
に集へる人を称云成りたる者ふし通証よ此歌を
引て可美所紙麻也氏部式主計式等云木綿紙麻子又
紙麻斐紙麻穀皮斐皮倭名抄引原名苑有穀紙斐薄紙
斐今云紙斐音我牟比と云ひ又今云加字曾紙麻之義
也と云る然る言ふて和名抄に楢穀木也穀和名加
知木名也と云るが楢は世に加字曾と訓はる本草
に皮班者楢則雄皮白者穀則雌蓋一種而辨雌雄耳
と云るは本より穀と同種より木綿より作る可き者な

△但次引る風工
記依る時ハ品
野園と云一を省
て信濃と云一
且ハ意を替りて科
野の義と成れり
由ハ傳一巻百
十一の科野の義
を説て注る可

し古事記明宮殿大御歌志那陀由布佐那美邊表
と續けさせ給へるも科木綿の事を免語置
せ給へるも佐那美の佐らハ少い那美の衆もて
木綿の事たる状を云語るを地名の彼浪の係させ
給へる者多し然れハ志那と柔嬾と謂以て即楢
の一名たり成水と云りけり此を以て信濃國の地名
と成水と事彼總國と云ひ穀の能育つ處を結城と号
けたるは同ト云は是其手力雄神と由縁有る事次
云を見て知べし然れハ信野の科の生る野多し事右
仁也と有る以知り水なり又更級ハ酒科とて万葉十
四武蔵國歌多麻河泊尔左良須氏豆久利佐良左良

△先信濃國者姓昔
 建御名方命等之
 所任之地也治天下
 御神大己元孫命又
 大己命建御名
 方命巡行此國於
 到生河羅野詔此
 國者不重其地
 品也故云品野
 今之信濃者昔
 之稱也見之
 其由八倍三十
 丁也一五百
 廿多事十丁
 廿多事十丁

尔云々有る類あり埴科の埴土の地は科の生ふ
 る可く此又准りて余を以て知てきあり又神名式
 更級郡波用科神社佐良志那神社又富信神社も多岐
 志那と訓て下り四和名抄又同郡富信郷有り又水内
 郡妻科神社有り然るを冠辞考之奈射加流條も万葉
 十九卷に安志比奇能山坂越而去更年緒奈我久科坂
 在故志尔之須未琴と有る引て階坂有る越国て不意
 ありと云はれたる然る言ふるが信濃をも級坂有る
 国名も由又云はれたる深く思ひ水さし説あり
 又古事記に志那陀由布を彙編に撓田ふふ竹と續け
 らるるありと云はれたる其信濃の地名も手力雄神も所以
 有て起る事を知る法は神名式に諏訪郡南方刀美
 神社二座名神大有る兼和十年御紀より以来の正史
 にも健甕名方富命前八坂刀賣命と有て夫婦二柱御在
 し坐か其男神は上社に坐し女神は下社に坐す社傳

あゝ然る事にて和尔雅にも下諏訪八坂入姫命詳
 繪詞傳と云るも其社記に説より斯るに神名帳頭註
 にも建御名方神坐信濃國諏訪上社は也下社片倉邊命
 是天手力雄命男也と有て上社は合水とて下社に御
 神を手雄神の御子神と云ふ由より違へり其違ふ所は
 力を得て考ふるに傳十七三百十云る如く拾遺に此
 段より長白羽神伊勢國麻績祖と有る其神神祇本源に載たる古語に金鷄命
 孫長白羽命也と有て其金鷄命手力雄神の御子天日鷲神の御在し坐
 すと右に片倉邊命も天手力雄命男と見えたり其天
 日鷲命の孫とて長白羽神の子と坐すと可し此天神本舊傳記

天八坂彦命伊勢神麻績連等祖と有る此神は天八坂彦命の御事ありけり
水一如く長白羽神天八坂彦神の御事ありけり
坐り其片倉邊命天八坂彦神の御事ありけり
少新れ心天八坂彦神の御事ありけり
八尺木綿の瑞々しく長く謂ある神名よむ
有けれ心八坂刀賣命の信濃國の地は科を殖生し作
くく神坐るを其建御名方神の諏訪に御在し坐
し着て後又后神と成り世御在し坐る可し又傳十
九三百又云る神名式に遠江國碓原郡服織田神社
ハ其白羽神坐るを警田郡須波若御子神社御在

坐る由有る聞ゆるあり若し和名抄郷名に信濃國
伊那郡麻績美更級郡麻績美あり亦考ふ可し根
據+あり又立復り上云る出雲國島根郡の所以
に就て風土記に美保郷郡家正東に七里一百六十四
歩所造天下大神命娶高志國坐神意支都久辰為命子
俾都久辰為命子奴奈直波比賣命而令産神御穂須
美命是神坐與と有る其所以の相結ハゆり合へる
あり甚く奇異ありけり事共ある然水ハ月讀尊より
島根見命等其御子と云るも皆故由有る就て出
たる事ありけり又天手雄神の御曾孫又富水八
坂刀賣命建御名方神の御子と成り御在し坐るを
ハ少縁の事ありけり其始ハ天稚彦ハ其御子と有る

味相高彦根神右天禰日女命其御女坐於
引引健御右方神坐於因三及八廿給
ひけ三傳十九四百八上五十二註三如藤原系圖
謂三玉立命即天石門別安國玉立天神御在
坐十此就古史徵二姓氏門部連牟須比命見安牟
須比命之後也又河内國浮穴直移受牟須比命之後也
有三安牟須比命此天手力雄神亦名為三此
比三信二然三言三安牟須比命為二物三蓄息事
云三此神產靈御名負世奉三事三彼大雷
神御子御在坐石戸破三手力以天誓戸
引開廿奉廿常世二圖を開廿給二御功即國を

安三為三所以為三申三更三此神御女許登
能麻遲媛命興台產靈神右神御在坐天見
屋命御祖多拾遺二高皇產靈神所生之女名曰栲幡千
姫命其男名曰天忍日命又男名曰天太玉命有
三其原系を云三實此神御子等坐由已
三往云三如三其栲幡千姫命天鈿女命坐
天見屋命右神御在坐天忍日命大伴佐
伯日遠祖御門を守奉三給二天太玉命忌部日
遠祖坐太御幣事を立三給二此三又天羽槌雄
餘三天日誓神作水綿神坐三又天羽槌雄

神ハ倭文神ニ坐テ此キカ雄神ノ御子多ク事傳十九
三百^{二十}ニ徴シ云ク如ク又傳十一^{二十}ニ註セク多
久豆玉命ハ此神ニ御在シ坐中證を得テ見水ハ子置
帆負神也此神ハ御子^ニ彦狹知命ハ御孫ニ當レ
シ又御子天村雲命ハ水取^ノ功有^ル神^ニ度相神
来^リ祖^リ又御子天御梶日^々命ハ味耜高彥根神^ノ
后神ト御在シ坐テ穀を殖坐シ多^ク功^ニ依^ル水^ト御
名^多可^ク思^ヒ出^テ書^シ奉^ル水^ト御子等^凡テ
九柱許^多其外^ニ有^レテ^モ何^レ水^ト此^レ磐戸開^ク時
より始^テ高^ク貴^キ御功坐神^ト御在シ坐^ルを思

ふ^ニ斯^ク御子神等を數多^ク成^シ給^ヒテ然^ル事^ト御
神功を令成給^ヘる^多む^レ允^ニ安年須比命ト申奉^ル御
名^ノ良^ク所^ニ有^リけ^レ又玉立命ト申^ス也^モ靈主^ノ
義^ニ其^レ御靈を御子神等^ニ幸^ヒ分^サセ^テ御在シ坐^ル
各^レ其^レ御功を有^リ給^ヘテ謂^フ又天孫降臨章^ニ
謂^ユ也^ハ天國玉神也此神^ト御在シ坐^ル其^レ此^レ大
國主神^ト荒魂^ト申^セ也^ト同^ト其^レ神^ト吾親^ト
治^ル大地官^ト宣^ヘ也^ト例^ト天上^ニ大地官^ト治^ル
させ御在シ坐^ル御事^を明^ク奉^ル尊^ニ奉^ル可^ク
御事^{あり}然^ル天^ノ神^ト多^ク御在シ坐^ル中^ニ
斯^ク許^リ御^事未^ダ氏^ト多^ク支^別也

大和國高市郡名園
坐多入巨五神社二座
次新嘗と有し又

廣く御在し坐す神ハ非可一然るも世人ハ唯手力
也云日りの眼を肴て見ら故此神才安年須此命ハ
申し其より甚大なる御功ハ御在し坐す御事を且
ても知くざるも甚傍痛事多しゆ今如此説明
く奉ると雖も猶百十が一又此神を多久豆玉命ハ
申奉る事ハ姓氏録和泉國神別天神ハ瓜工連神魂命男多久
豆玉命之後也略又左京神別瓜工連神魂命子多久都
玉命三世孫天仁木命之後也と有て神魂命子と有れ
ども其ハ例ハ大抵ハ其出自を云るも此手力雄命
子渡る世給へる事傳十一二下註せざるを以て辨ふ
可一神名式ハ對馬島上縣郡天神多久頭多麻命神社
下縣郡多久頭神社御在し坐す此神ハ御在し坐

中垂申すも更ふり名義多久都ハ巧出タケツて波手置帆
負彦狹知二神ハ御祖と坐す謂ふて右ハ説く安年須
比命と申す名義ハ相通ふ可一然るも神名式ハ大
和國高市郡氣吹留響雷吉野大國栢御魂神社二座並名
神大月と有る御社を今九頭明神と申し彼戸隱山神
を九頭龍權現と申せざるも其ハ寄せて思ふも多久都
の大義ハ一々久都ハ國守ハ義ハ一彼天津國玉神
子渡る世給ふ謂ふりけり神武天皇御紀ハ更少進亦
有尾而披磐石而出者天皇向之曰汝何人對曰臣是磐
排別之子此則吉野國櫛部始祖也と有る姓氏録大和國神

此後風土記曰天石
帆別命今天石門別
命と有る如く

別地 國栢出自石穗押別神也神武天皇行幸吉野時
川上有遊人于時天皇御覽即入穴須臾又出遊竊窺之
喚問答曰石穗押別神子也尔時詔賜國栢名と有る
見ると石穗押別神此手力雄神を石戸別命と申す
同名と有る其子と云ふ子孫の謂ふり此の詔賜國
栢名と有る天皇其天國玉神昂大國栢名之神を所知食
て其事を宣ひ出させ給へるを以て國櫛の名は起水
る者多し可し但多久都の右の如く巧出ふがごとく
多久を梓の事と見ては其所由無き
訓の訓は然れども多きを大に如く又上
始連條又云ふ此天手力雄神の亦名阿麻乃西字乃命

と申す此を姓氏録左京神別
中天神に宮部造天壁三命子天
背男命之後也と有る子ハ子孫の謂ふる例の抱
可うとぞ備背男の背の借字とて進壓の義多し可し
天孫降臨章に一云二神遂誅邪神及草木石類皆已平
了其所不服者唯星神香ニ背男耳故加遣倭文神建業
越命者則服其第二一書に時二神曰天有惡神名曰
曰天津甕星亦名天香ニ背男請先誅此神と有る香ニ
背男ハカキ炫キ壓キ男ヲの義多し事天津甕星と云を以知べし
然れハ天背男命と申すハ神威ハ猛く勝れし御在し
坐す意ふて此神の御子天忍日命ハ天壓人命多し事

上 百四十 一云云 天堅神の例を以て准るに知る可
一 下 然るに右ハ上九十九下正一云々如く今本
者あり 連と巨椽連との出自を正して手カ雄神の亦
名と知る事ふるが同録山城国神別天神の神宮部造
葛城猪石園天降神天破命之後也云々と有て其六世
孫ある吉足日命ハ崇神天皇御世の人ふりハ遠く後
日天降坐し神と見ゆるか天破命ハ天背男命より何
世の後よりけむ ○警戸側正書ハ警戸之側と有て
今知る可くず ○其訓同傳十九 百九十 一云云 ○侍を加志佐母良比
氏と訓ぬると自隱に侍り給ふ所ふ水ハ加久理佐
母良比氏と訓べし正書ハ立字を以古事記ハ隱立と
有る同く訓ハ隱字を訓添ふる事允る當れりと云
べし其事傳十九 百九十 一註せし考合す可く事より

拾遺此ハ新殿にて
所事ハ今大宮に書神
侍於御前書經戸
命稱管向之命二神
守衛門と有侍
字解と云云
外同上一ハ云々

備侍とハ狹字ハ義ハ其所ハ眼を著ハ外を思ハ二句
一書より神名ハ清之湯山主三名狹漏彦八島椿と有
る三名狹漏ハ悉皆狹字ハ義ふる是あり 天孫降臨章
第二一書ハ惟尔二神亦同侍殿内善為防護と見え古
事記同段ハ大國主神ハ僕者於百不足八十垆手隱而
侍と申給ひ猿田毘古神ハ言ハ聞天神御子天
降坐故仕奉御前而參向之侍と申給へる事見えたり
万葉二九下 一佐田乃國邊尔侍宿為尔往と有て其並
びハ東乃多藝能御門尔雖伺侍云々又 三十大殿字振
放見乍鶉成伊波比廻雖侍候佐母良比不得者三 三十九下

六七十五 大御舟竟
而後字布高島之三
尾張野之奈伎在思
所思

一何時鴨此夜乃將明跡侍從尔寢乃不勝宿者六十八
二風吹者浪可將立跡侍尔八三十四天漢伊刀河浪者
多祢祢母伺候難之迹此瀬字十三三十三妹尔相時候
跡立待尔十一十三皇祖乃神御門字懼見等侍從時
尔相流君鴨ふど有り又古今集詞書同卜御時上の
侍より男等大御酒賜ひて大御遊有ける序云云
又田村の御時女房の侍より御屏風の繪御覽下け
る云云又寛平の御時唐使の判官召され侍り
ける時東宮の侍より男等酒給べける序云云
多と有り禁中の伺候所を何れ侍と云ふあり又其

東歌云御侍御笠と申せ宮城野の木の下露の雨は勝
水より有り供と成て附従ふ人を云ふ夕顔巻の
美しげなる侍童の姿好ましく云ふ有り此類ふ
少此は隠侍と訓る隠水居伺ひ給ふを云ふ右
の八巻より伺候り同く佐母良比ありと今本
は字加賀比と訓る其意味無きハ味ふあり又士人
を侍と云ふ其御許の守居の義を以たり和名抄の侍
從局於毛止比止女字知岐美侍從於毛止比止万知岐
美と有り御許人女前君御許人前君と云事より侍と
云云○引南之ハ此ハ此言は約めて餘事を省け
る者なり此所古語拾遺は爰令天子力雄神引啓其扉
遷座新殿と有る所より此より其南と有り其石室の
扉を云ふ引南と云時より引字は甚く力有て見ゆ

めり神名式に伊豆国田方郡引手刀命神社今賀茂郡
十足村^{トラウ}引手力雄山と云ふ御在坐か如此く御名引
字を冠ふて奉祀るを以て其甚しき御有状
多む同奉り知くはれりけし備此所正書より手力雄
神則奉系天照太神之手引而奉出と見え古事記より
其所隱立之天手力男神取其御手引出と有る事云
いし此と拾遺の文ハ麓さか如くして却りて其正
實を多む得たりけし然るに己に傳十九四百五十七下
論め書せらるが如く此時は其祿を引開けて脱落
し給へるハ此天手力雄神に御在坐し其御手を奉

承りて引出し奉らるる天鈿女命亦名持幡千之姫
命に御在坐し然るに^{ナラ}神宮より此天手力雄神持
幡千之姫命二柱を合せて御戸開神と申習へりけ
り然るを此ハ其祿を引開給ひし事ゆを云て其
御手を取て出し奉らるる事ゆ細くし事ハ皆
かゝる略を載さるゆけりけり古より人皆心も着
ずて有けり但此ハ傳十七卷百八十一下百九十二
下註せらるが如き天鈿女命ハ正しく
持幡千之姫命に御在坐し云ふ事を慥に知得たる
上さるる其意を得難し事ゆ有けり然ハ明
め知まじき故其延喜七年勅進皇太神宮祓宜譜圖帳
に天手力雄命天石門乃左方亦居天乃於須々右方亦

居^天云々有^二引合^一して右^二引^一る拾遺の文の續^中
は則天兒屋命太玉命以日御綱廻懸其殿^右有^二天手
力雄神^右其^右跡を引^一開て天鈿女命^右出^一奉^一く^一の直
は其新殿^右日御綱を畏^一以^一て御装束の事を成^仕
りて再復警戸^右還入^一る^一給ふまじ^一く物為給^一ひ^一俗
は油断を為^一ぶ^一状^一なり次^二令^一大宮賣神侍於御前
豊磐向戸命梯警向戸命^二神守衛殿内^一有^二天照太
神^一の女神^二御在^一坐^一せ^一ハ殊^一は御許^一侍^一く^一不^一神^一を^一
其御手を奉^一来^一りて引出^一奉^一出^一り^一天鈿女命を^一
令侍給^一へ^一る^一なり此^一より大宮賣神と申^一御右有^一なり

又其御扉を引^一開させ奉^一給^一ひ^一由^一は縁^一て其天手力雄
神^一天石門別神と申^一御右御在^一坐^一又其分身^一
給^一ひ^一て豊磐向戸命梯警向戸命と御右^一負^一せ^一る^一なり
此所謂を探求^一て^一右^一註^一る^一如^一く天手力雄神と天
鈿女命と二柱^一りて御戸開^一の事^一仕奉^一る^一給^一へ^一る^一事
灼然^一け^一れ^一右^一引^一る^一正書^一と古事記^一と^一事^一相混
雜^一たる^一を知^一べ^一く此^一より御戸開^一の事^一を云^一て雜事
を漏^一され^一たる^一を知^一べ^一く拾遺^一の右^一如^一く文^一共有^一て^一甚
く愛^一た^一る^一を^一上^一其^一照應^一不可^一語^一の^一脱^一たる^一を^一云^一
知^一へ^一る^一者^一なり^一け^一れ^一但拾遺^一の右^一の神等^一を^一是^一並^一太玉命
之子^一也^一と云^一る^一を^一以^一て^一思^一ふ^一なり^一

上三ノカク此神を
天石門別家國五三
神と申奉るハ素より
此神功日依りて
名之れハ論無言ハ猶

公備前國神野郡石
門別神社今戸
宮と申すハ右同

く右等ノ神等ノ事實ハ明
かり其細書ハ廣成宿禰
ノ其本文ノ傳ハ彼氏ノ
古傳多ク事灼然ク云
波止和氣神社を頭註
テ信ニ此時ノ御功用
然ク和泉國正應年中
すハ所見ナリ又土佐
天石帆別命今天石門
巖別りて此ノ石門別
上 百八十
ニ下
を披警石而出と見え
其を古事記ニ此人押
分巖而出

來ト有を合セテ思ふ可
賀茂郡伊波氏別神社
を同郡伊波久良和氣
其伊波久良ト云ハ傳
ハ其所ニ引ル山城國
中を舊記ニ天神所籠
天石窟を云テ證スル
命兒天石都傳居命之
宿禰同祖明日名門命
明日名門命三世孫天
河内國神
別天神
多采連神魂
額田部額田部
額田部宿禰
山城國神
額田
別天神

若くは額田部
 命の裔孫と云ふ
 三神と云ふ天津彦根
 命の裔孫と云ふ額田
 部と異ふは依り額
 田馬の故事に依り額
 田部より此の神
 戸の神孫と云ふ由を
 以て按ずるに額田部と云ふ
 多し抑も此の神
 等しき其の
 見たり

部宿祢明日名門命六世孫天由久富命之後也又右京神別
上天額田部託玉額田部宿祢同祖明日名門命十一世
 孫御支宿祢之後也と有る其撰津國神額田部宿祢角
 凝魂命男五十狹經魂命之後也と所見たり其儲其明日
 名門命と申すはアケ明ハ此と引開之と有る御功を申す
 るり日名門ハ日之門にて日神と刺籠る御在り坐
 し磐戸の御事より四神出生章第十一書の速吸名門
 を神武天皇御紀と速吸之門と有る同ト然れハ明日
 日名門命と申奉りし石門別命と申すは同義と御
 名ふる者ありり
但其五七狹經魂命と申すを此手力
 雄神と同神と見たり師説と有る

事ありて予見ハ少く異なり其事ハ傳五卷三十
 三下と云り儲此石門別神の御社あり國々多あり
 を其ハ己と傳十九卷と註
 せ此ハ此と合せ讀む可し又傳十九五百二と註
 かく古事記御天降段ハ天石戸門神亦名謂攝石窓神
 亦名謂豊石窓神此神者御門之神也と有る右と引る
 拾遺に令豊磐向戸命攝磐向戸命二神守衛殿門と所
 見て正しく二神ハ御在り坐す趣より後世御門神と
 申すも其如く多れハ此二神をより天石門別命ハ亦
 名と申すむ事違へると似たりと雖も熟思ふと磐戸
 開の時より一柱ハ天手力雄神と御在り坐けるを此
 新殿に遷坐奉りて御門を守衛給ふと云ふ御身を

二柱は分させ御在し坐て御門の左右に立せさせ御
在し坐けるあり然るも古事記の如く亦名謂攝石窓
神亦名謂豊石窓神と有る時ハ一神として二名御在
し坐り似たりと雖も其ハ唯人の上の事なり有り
此其名と云ハ傳四五十一註るが如く行事を以て若
し負ふ古の式ありけり神等御上より其異も
行事の御在し坐り時より其御魂より分りて各一
箇の神と別々顯はれさせ御在し坐り事より御名
多く渡り給ふ神なり其行事も多く又分身も決
て多く御在し坐り御事あり有けり然れハ古事記

多るも分身謂某神亦分身謂某神と云と同一事なり
本より二神の心ありと所見たれハ拾遺の二神も記
の亦名七事の全同とくあり有けり又上九十六丁
註るが如く縣大養宿禰大標置始連の家傳ハ此
る阿居太都命と申す御名の義ハ御門神と御在し坐
りて其殿門の南園を掌給へり謂て御門奈詞ハ攝
磐牆豊磐牆命と御名申す波四方内外御門如湯
津磐村久塞坐氏云々朝波南門夕波南門氏云々所
見たる南園アケクラ是より姓氏録左京神別中大伴宿禰高皇
產靈命五世孫天押日命之後也略雄略天皇御世以天

公長海平正書引
 奉養天照大神之
 引而奉出の細書
 三つを神奉出
 天照大神時引故
 其岩戸信州戸
 隱山是也と見え
 又

淑貞賜大連公奏曰衛門南園之務於職已重若一身難
 堪望與愚兒語相伴奉衛左右勅依奏是大伴佐伯二氏
 掌左右南園之縁也と有るも合せて其然る所以を境
 可なり者なり此天忍日命と申すは健又手力雄神の
 御子御在し坐る可事を見得て
 己は傳十一卷二十二丁且云今又上八十三丁
 天日鷲命の傳より註し置るを其詳なる事ハ天孫降
 臨章第四一書の傳 倚此又引南之と有る天石窟の扉
 の行方ハハ神名帳頭書又神社考ハ天手力雄命以
 以其所取石戸地空此即落而成山信濃国戸隱山是也
 と有る世は名高下信濃国水内郡多々戸隱山の事ハ
 此ハ此ハ手力雄神の御在し坐す由人知れりか如し

然るも此ハ彼香山天山天詔詞山と国を隔て三
 分水降りら加く猶割分水て落降りありけり其
 ハ柳生系圖に引る春日社記曰昔天照太神開天警戸
 出現時天香久山岩戸分爲兩其一者飛行於虚空其一
 者留在大和国号其處曰神戶岩と有る香山と岩戸と
 分水て兩ニ成れりハ非ず天香山は在つる天石窟
 の扉の兩ニ割れりハ其一者飛行於虚空ハ有一右
 ハ謂ゆる戸隱山の事なり其片方ハ右ハ神戶岩と成
 り由り神名式ハ大和国添上郡天乃石立神社と
 有る此社今其ハ柳生村あり岩戸谷と云ふ御在し坐

すハ右ノ神戸岩ノ事ある可一又其天乃石立神と申
す、此手力雄神ノ御名ふる事知く此たる又其社記
ノ紀伊社を小社記ニ紀伊社赤穂明神島田明神御前
石立明神天乃石吸明神と有テ此四座共ニ何れノ式
内ノ社ふるを其紀伊社と云ニ就テ考るニ牟婁郡天
手力男神社式ノ所見たり其神を請奉れり本國
ノ地名を以テ社号とし成せり二社記ニ春日前
立明神天石吸明神是也と有リバ御前石立神社と天
石吸神社とハ同神なり共ニ天手力雄神ノ御在し坐
す御事を明くして又其一証より備ふ可き者あり

一猶其磐戸の碎落たる所有けり傳十九四百八引
る豊葦原卜定記ニ天神母感玉比岩戸弘向玉波手力
雄神引出奉之與再常聞乃雲晴奉利其籠玉之磐戸片
園波投弄給布時落天今乃西石座止成利其片園波今
岩倉乃里仁留礼と有る此ハ甚く後ノ物なり然る
古傳ノ遺水るを書せる者多可一今京ノ北ニ岩倉
と云地有テ其處ニ石座明神と申す御社御在し坐ふ
るニ舊記ニ天神所籠之窟也と有るニ少縁ノ事と
聞えされハ其戸隱山を本として右ノ神戸谷此ノ石
座多と皆同時ニ天より落降りて此地ニ然る巖壁ノ

山に成水者ありく此等傳々各其回との古
老傳ふ所あり古風土記ふど必記せし事
共ありけむ其書亡びてば如此く得去る所以
有て神代古説又契合へむ必採て其欽典を
補ふふむ神の質して耻奉る事ありける
く神名式ある伊豆國賀茂郡伊波久良和氣命神社と
申す石門列の義あるを以て即岩倉ハ石室ある事
を知べき者あり又國々石倉命神社警座神社など
多在るを皆がら此手カ雄神の在し坐くむと思
ゆる由已傳十九卷に註る如く備又右の記伊社
の事就て思出たる神武天皇御紀に到熊野神邑
且登天警盾仍引軍漸進有る天警盾を續古今集
真熊野の神倉山ハ石疊弁少果てし猶祈る哉と有て
神倉山ハ云由あるハ右の岩倉の例に等しきや又
警盾ハ石立と言相同トを思ふ可く又其天手カ

男神社の所在し坐す牟婁郡ハ右の熊野の地あるを
も思合す可し又其天石吸神社ハ天石統と云事ある
石門列ハ申すは同ト意あるや○日神之充滿於六
合ハ上三十云るが如く古事記ハ上ニ爾高天原皆
晴葦原中國悉闇と有て此ハ故天照太神神出生之時
高天原及葦原中國自得照明と有て上下ハ照應宜し
きを御紀ハ正書一書共ニ相混り見べく物為れ
たるが故ハ正書ハ首ニ故六合之内常闇而不知晝夜
之相代と云文有て此ハ當る文を略る此ハ右の
如く文有て雖も上ニ然る文の無きハ互ニ其片方を
のこ云て其片方をハ相背られたる者あり即古事

記の事一きよし如ずてふむ有けり然し有れども此
も亦云知ず奇しく妙なる味を含みて有る事を今ま
で人も我れ得知ずて有けり其ハ此ハ日神之光満於
六合と云ハ四神出生章日神の御生坐し所ハ此子光
華明彩照徹於六合之内と有と向ト文ふるもて天日
の光暉ハ即其日神の大神身より放たせ御在し坐す
大神先^光の御在し坐す御事を體に徴し奉れり文あり
けり其ハ傳十九 百三十七丁二
百五十二丁 乙の註るや如く天
日の始ハ可美彦尊^{葦牙}起り天常立尊日成て惟神ハ
し^て照明るや御國はし^り日神の未所知着せさせ給

のざりし以前も本より光を放ちて六合を照す域
ありし事云も更あり然るも二柱御祖神ハ天照太神
を生奉らせ給ひけり奇異ハ光華明彩し御在し
坐て天地の内ハ照徹させ給へるが故ハ天柱を以て
送舉奉らせ給ひて日神と成し奉らせ給ひり然る
を其後ハ火神を眞名弟子ハ生給へる此事ハ依て伊
弉册尊ハ黄泉國ハ罷らせ御在し坐し^りハ伊弉諾尊
御怒坐て斬せ給へりけり其血ハ天ハ上りて天安河
と成り其骸ハ天ハ上りて天香山と成り又其日就て
成給へる神ハ各天ハ上りて日神ハ仕奉らせ事と成

ハハ愈其天日之光輝今も瞻奉之如く備ハ少足
ハセ給ヘラ日有ハ然ラ日天照太御神日高天
原を所知着セ世御在シ坐シ後ハ固ヨリ照明ク不
少シ天日之光也後ハ火神日御靈日燃上リ凝著テ相
添水之光也日神一柱日御上リ歸奉ルカ故日其日
神日自若ニ御在シ坐セクニハ其大御光今も見奉
ルカ如ク御在シ坐シ如此ク日神日警戸隠ク世御在
シ坐ケル時ハ天日日固有日光也火神日追加ハ取
光也其日神日持隠クセ世御在シ坐ケルを以テ世
中ハ常夜往ケルニ有ハ此日神之光満於

六合と云るより甚く味有る事ありとい云ふなり天日
神との差別ハ三大考ニ吾古典ニ天と云ハ高天原と
云ル物ハ虚空ニ非ズ虚空ハ上方ニ別ニ在リ也
日即高天原より引ケル然レハ日ハ天照太御神
ハ非ズ其所知着セ御日ニハ天照太御神ハ日
中ニ坐シ神あり其故ハ記日神武天皇段日吾者
為日神之御子向白而戦不食ト有レ是日神と別
事を知ベシト云ルニ甚能聞エナリ此を以テ天日
の光ハ其中ニ御在シ坐ナリ日神日大御光
有ル事ヲ曉ル可クニ日神之光トハ右ニ引ケ
云ル如ク光率明彩照徹於六合之内ト有
天照太御神日大御身日大御光
あり其即天日之光輝是より前章第三一書日神
之子ト有レ其を古事記日代官民歌ニ多迦比
迦流比能美古ト詠ナレ此を以テ日光ト云
レ日神之光ト

○日本書紀傳二十二
○百七十五

少又傳十六下
大雷大明神と有る火
明の光を云ふ二十
神の光を云ふ二十
天照國照天火明神
鏡の光を云ふ二十
明の光を云ふ二十
多より光の火明を云

公孫月乃光毛不見又
三行

云義ふるを思ふ可し備光と云ハ火明と略ふる可し

天孫降臨章第二書次火盛時生見號火明命第三書初

火焰明時生見火明命第五書其火初明時蹟誥出

見云云火明命ふと有る例是る右ハ火焰明時又ハ

火初明時と云ふ即光の義なり神武天皇四年御紀に詔曰

我皇祖之靈也自天降鑿光助朕躬と有る光は今我是

日神子孫而向日征虜此逆天道也云々禮祭神祇背負

日神之威隨影蹶蹶と詔賜へると對ひし宣ふるなり万

葉三二十七下二十夜光玉跡言十方四四十二月讀之光二來

益又月讀之光者清雖照有七三二月讀明少夜者更下

作十二三十六下二十射去火之光尔伊往十三二十霹靂之日

香天之十五七二月余美能比可里宇伎欲美又十一月

余美乃比可里宇伎欲見十八十八小宇夫良火能比

可里尔見由流又等毛之火能比可里尔見由流十九十三

四四光神鳴波多憾孺ふと見え古今集より春日の光

當に我るれと云ふ奥山の岩垣紅葉散ぬ可し照日

の光見ると時無くて又日の光義一別ゆか石上古より里

花も咲けしと云ふ有る其外数知らず多し語る所は今

更の例を與ふるに及ハず右に云ふが如く光ハ火明本

らぎ火と云物有る其餘韻の溢るる光と云ふて有るなり

事一傳八卷四十一下云云を見て此
美知登富流と訓べし事を知り備此満字を名
義抄曰美都と多流と
多理奴と訓也有るなり
○諸神大喜の第二一
書曰諸神憂之と有る對ふ所も多し古事記も於
是天照太御神見畏向天石屋戸而刺許母理坐也年高
天原皆暗葦原中国悉闇因此而常夜往於是萬神之聲
者狹蠅那須皆滿萬妖悉奄と見え拾遺も群神愁送
手足固措と有るは共は是く憂給て一有状あるを
此も其又も故曰大喜と云ふなり備又傳十九
二下曰註るが如く此も大喜と云ふ當て拾遺も當此
之時上天初晴衆俱相見面皆明白伸乎歌舞相與稱曰

阿波礼言天暗也阿那於茂志呂古語事之甚切皆稱阿那多
能志言伸乎而舞今指樂事阿那佐夜聲也飲木
也振其葉と書し即謂ゆる七直會是なり
之謂也
置り合と讀て曉る可なり備此諸神大喜
の大享り伊多久と訓べし古事記三貴子生坐段に此
時伊邪那岐命大歡喜詔云く神武天皇
御紀曰天皇大喜と有るは此例なり
○即科素契鳴
尊千座置戸之解除と有る即字の常は如く異無しと
雖も右の諸神大喜と有る直會の場は先の諸神憂
之と有る許事を成し給てし神を山に打置り解
除を責る事なり急なるを義知るせばし者なり
けり若て此の第二一書曰科深於素契鳴尊而責其板

具と有る其板柱を科する事あり委しく正書日然
 後諸神歸深遇^國於素戔嗚尊而科之以千座置戸と有る
 下日傳十九五百六十一丁日註り○手爪足爪ハ第二書
 有^手手端吉棄物足端凶棄物と有る手端足端ハ即手爪
 足爪と云事あり右ハ有手爪之吉棄物足爪之凶棄物
 と云又異ふふと云り其事已ハ傳二十一六百六十一
 註るか如^{正書ハ指其手足之爪贖之と見え又}古事記にも亦切鬚及手足爪令拔而云
 拾遺にも令拔鬚髮及手足爪而以贖之と有り和名抄
 手爪和名豆ヤ手足指上甲和名豆乃古布と有る爪を
 豆ヤと云るハ佳しと雖も甲を古布と訓せたるハ全

く字書にて和名と云べし者多し大同类聚方日都
 萬念と有る即爪根と云事あり右日指甲より鬘と可
 くある所思えたる武烈天皇三年御紀日解人指甲使
 極署預と有る指甲を都米と訓る日私記あり那麻豆
 米と訓る其ハ拔去たる指頭を云ふれハ右とハ同ト
 云々今日生爪を抜くと云事有り若痛日甚し
 事あり指甲より都鬘根と事ハ云々云々ハ指甲日全さ名より冰
 云々云々云々ハ鬘根と○為吉爪棄物為足爪棄物
 の為字ハ傳二十一六百六十一丁日註るか如く此物化りし
 彼物と為る日謂るけれハ其手爪より善解除ハ板
 柱と化り足爪より惡解除ハ板柱と化り出たる趣不

なる由あり其物の何物、此に成出たりけむ今知る
可うさざれども傳十九五百八に云ふが如く若くは
上古より被柱を令用らるる馬ふりけらるる所思え
たり又若くは善解除惡解除ハ中古に謂ゆる荒世和
世の事より有ければ其節折竹ハ藤を以て手ハ末足
の先を量り其物ハ身ハ在りる深過を科して河上ハ
解除ハ事傳二十二百七十に註さかくふれば其藤ハ
生出たりけむも知べし九丁に註さかくふれば其藤ハ
羅能小野之七相管手取持而久堅乃天川原尔出立而
潔身而麻之字と有る全く此ハ故事を取て詠る音ふ

るが其素戔鳴大神ハ和魂と御在し坐て被戸神ハ渡
るに給ふ速佐須良比咩神ハ御名と左佐羅能小野ハ
同く又藤サ、ラ在り義ふると彼此思合すれば右ハ吉ハ
棄物ハ凡棄物ハ善解除惡解除ハ本ハ立つ時ハ手ハ
足ハより節折り藤とハ化出たりけむうと思ふ考ハ
棄べしとされば云ふり後人深く遠く思慮り考定む
可事事より一但何れもしてハ為字ハ化為ハ義ハ
凡を以て直ハ被柱ハ用ハ違ハざる事ハ註さかくふれば
くわくふりてハ凡ハ用ハ其解除ハ太諱辭ハ下ハ
太諱辭此云布斗能理斗と注されたり備此ハ解除ハ
の言を冠ふとせたりけらるる古事記石屋段段ハ天児

屋命布刀詔戸言禱白而有此事依其天兒屋
命太祝詞命申帝名御在坐事上百五十五
註か如然神祇令其祈年月次祭者百官集
神祇官中臣宣祝詞有如年中恒祀祝詞を
宣本として仕奉れる同ト神代も何く此
の御祈就て申さる太祝詞方主有故其
よ云分む為然云よて解除之太諱辭云て猶
祓詞云むか如同令元六月十二月晦日大祓略
百官男女聚集祓所中臣宣祓詞有專同ト状有
を思ふ可し大祓詞大中臣天津金木本打切末打

断氏千座置座置足被志天津菅曾本新断末新切
氏八針取辟氏と有右謂ト部為解除云
小當次天津祝詞太祝詞事宣礼有彼中
臣宣祝詞云當此時天兒屋命其解除の
所作成し給ト其解除之太諱辭事を掌ト
せ給トける方葉十七五十奈加等美乃敷力能
里等其等伊比波良倍所見ト其祓詞宣事事
と中臣祓歌と有か如くて
有る歌中古の物有る事ハ上世の風儀を詠るよ
て令條以上の古式を伺ふ足る可し者有り上但

△くむを再晴し
て陰陽師の所作の
加ふに成ぬる事
あり

古より天兒屋命より世々相兼て中臣氏にて右二
を兼て仕奉りしむを後事より多く成りて來ぬる
り下部より其神裔なるを以て
然る方より令仕奉る水しあり 若て其を祓詞とせ
云るに此解除之太諱辭と云を略され者より備天
兒屋命の宣申より太諱辭や如何よりし事あり
むと云ふ正しく大祓詞の中より在るとある所思より
ける然文中より含て申す例を擧げ示さむより先鎮火
祭詞より高天原より神留坐皇親神漏義漏美能命持日皇
御孫命改豊葦原乃水穗國より安國より平久所知食止天
下所寄奉志時より事寄奉志天都詞太詞事より申久
云天津祝詞乃太祝詞事より祢辭竟奉止申と有て

天津祝詞、其中より在り又道饗祭詞より高天之原より事
始より皇御孫之命より祢辭竟奉云神宮天津祝詞乃太
祝詞事より祢辭竟奉止申と有天津祝詞を其中
より收めたり又太神宮月次祭神嘗祭詞共より度會乃宇
治五十鈴乃川上より大宮柱太敷立天高天原より千木高
知天祢辭竟奉留天照坐皇太神乃大前より申進留天津
祝詞乃太祝詞より神主部物忌等諸南食止宣と有て其
天津祝詞をバ次より載るなり又大殿祭詞より汝屋船
命より天津奇護言より言壽鎮白久云と有天津
奇護言より天津祝詞の例なるを其より其詞より中より收る

波早家無と有る神言の宝龜元年御紀に使雅樂頭從
五位下伊刀王受神教於任吉神と有る類にて傳七
十七の註るが如く太占の出る神の御心を神之命と
し神言とし云るなり其の直に神の御言を受賜り此
を謂れ此祓詞の神代より傳へ此より即神語を傳
來りるなり其趣は於て以りて違ふ可らざるに
有ける猶神語と云事ハ大嘗祭儀に造酒壺を神語
佐可都古又鹿吹服を神語所謂阿良多信是也
見え大嘗祭式に雜書を神語曰由加物又雜書神
語ヲ雜書同為由加物と有る何れハ中臣壽詞又ハ古
き祝詞の中在る語を云るなり其ハ神代より定少
て傳り來りる由を以て神語と云るなり唯ハ古
語を云ふ謂るハ亦其儀式ハ大嘗宮の宮垣なる
椎枝の事を古語所謂志比乃和惠と有て此ハ祝詞

ふども出づる語なるが故に若て其大祓詞より先
古語と云分てるを以曉る可し
王御百官を集へりて彼天津眾國津眾の條目を並
舉て其解除の法を教へ祓詞を宣ひしと示して如此
く成りたるむよハ天神地祇の納受させ御在り坐て
眾穢の遺るまじき狀を四の壁言へ分る言並べて即祓戸
神等其眾穢を祓却り先給ふ由事を委曲に載して
自此以後天下四方の眾と云ふ眾ハ亦と祓清めさ
せ給ふ由を右の王御百官共々聞食せと宣ふ事より
有れば其詞ハ解除の作法を入り示す詞より有り有
けり神の告る意更無しと云べし狀より然れども

神祇令祈年月次祭者百官集神祇官中臣宣祝詞の義
解_レ謂宣者布也祝者贊辭也言以告神祝詞宣聞百官
故曰宣祝詞と有_レか如_レ譬言_レハ其祈年祭詞_ニ集侍神
主祝部等諸聞食_登宣_{神主祝部等共}高天原_ハ神留坐
皇睦神焉伎命神焉弥命以天社因社_登祢辞竟奉皇神
等_能前_ハ白_久今年二月_ハ御年初得賜_登為_レ而皇御孫
命宇豆_能幣帛_宇朝日_能豊逆_登祢辞竟奉_久宣_{と有}
て高天原_ハ神留坐_{より}祢辞竟奉_{まて}右_ニ謂_ゆ
告神祝詞_{より}上_ニ集侍_{と有}より下_ニ祢辞竟奉_久宣_登
と云_まて_レ凡_てハ宣聞百官_{と云}是_{より}右_ニ如_く神

よ告_る詞を以_て人_ノ宣_るを以_て祭_{と為}せ給_ふ
て是朝廷_{より}御式_{あり}然_るを神主祝部等其_を受
賜_らし_り歸_りて各其社_ニ向_ひて_レ右_ニ告神祝詞_の
を抄出_て申_す御定_{あり}故太神宮式三時祭條_ニ朝使
進入外玉垣内玉垣内並皆跪先使中臣申詔_り次
官宣祝詞_{と有}て使中臣申詔_り九月神嘗祭詞
よ皇御孫御命以伊勢_能度會五十鈴河上_ハ祢辞竟奉
流_{天照坐皇太神}能_{大前}申_給久_常毛_進流_{九月之神}
嘗_乃大幣帛_宇某官某位某王中臣某官某位某姓名_子
為_レ使_ハ忌部弱肩_ハ太禰取懸持齋_理令_捧持_進給_布

公故同下祝詞云々
 此等神祇之例共を推して考る。神祇令云九六
 月十二月晦日大板東西文部上板刀讀板詞訖百官男
 女聚集板所中臣宣板詞下部為解除と所見たる宣板
 詞ハ即大板詞を宣る事なるが此ハ以告神祝詞宣
 百官云々同ト云りけり天津祝詞ハハ必其中
 日收て有べき事を曉る可き證なるを有ける此板詞
 祝詞トしハ云々ハ上引る万葉十七卷日奈加等美
 乃敷乃能里等其等伊比岐良信と有り更々ハ大板儀
 日中臣趨就座讀祝詞と見え大板奈式ト下部讀祝詞
 日云々ト同ト事なり但右ト下部ハ必中臣よりつる
 を心有り後人ハ然ハ此大板詞をハ中臣氏ハ宣
 改換たる者なり

御命^宇申給^止申^久と見え豊受宮此ハ同ト此ハ皇御
 孫尊ハ大御命を傳へて直ニ皇太神ヲ申^久所なるハ
 故ニ申^久詔刀ト云々次ニ官司宣祝詞トハ同詞ニ
 度會乃宇治能五十鈴乃川上^止大宮柱太敷立^止高天
 原^止十木高知^天稱辭竟奉^留天照坐皇太神乃大前^止
 申進留天津祝詞乃太祝詞^宇神主部物忌等諸^止宣^止祢宜内人^止
 宣^祢祢宜内人^天天皇^我御命^坐云々天津祝詞乃太祝詞
 辭^宇稱申事^宇神主部物忌等諸^止宣^祢祢宜内人^止
 有^久加^久皇太神ハ大御前^久宣^久上奉^久詞を祢宜内
 人等ト宣^久宣^久宣^久故^久宣^久祝詞ト云々此ハ申

と宣との差別ハ有^止水ト共ニ神ニ告奉る事一なる
 を曉る可^止此等ノ例共を推して考る。神祇令云九六
 月十二月晦日大板東西文部上板刀讀板詞訖百官男
 女聚集板所中臣宣板詞下部為解除と所見たる宣板
 詞ハ即大板詞を宣る事なるが此ハ以告神祝詞宣
 百官云々同ト云りけり天津祝詞ハハ必其中
 日收て有べき事を曉る可き證なるを有ける此板詞
 祝詞トしハ云々ハ上引る万葉十七卷日奈加等美
 乃敷乃能里等其等伊比岐良信と有り更々ハ大板儀
 日中臣趨就座讀祝詞と見え大板奈式ト下部讀祝詞
 日云々ト同ト事なり但右ト下部ハ必中臣よりつる
 を心有り後人ハ然ハ此大板詞をハ中臣氏ハ宣
 改換たる者なり

公卿史 三載今 下履中
 天皇二十一年三月
 十五日令伊與部員
 人菟大和國糟垣
 野有六路之狐卒
 然犯列牙不見具
 九及月陽有一大
 婦人招真人不覺
 依其色容官卒
 如蒙位有二九
 工口誦中臣祓卒
 抱如解醒病與
 人脫氣而歸と
 云事申祓古
 羊我出たり高昔
 中臣祓と云名ハ
 信ふれわと
 世不其詞を用
 ひたりし註ハ
 備ふ可なり又
 玉葉文治三年
 三月二日春日奉
 修御贖物方
 於坐中取入之
 次讀中臣祓と
 見え

其詞を申し習へる事を知べく太神宮建久行事
六月十六日 今一校神取
 記河原祓條 各立座同向河又葉曳切次御巫内人祓
 勤仕神主等各中臣祓祭文讀其後伴榊枝河流手洗後
 如元歸居と有て神宮の祓日用ひたりハ諸國より番
 く此詞を用ひたりし事知へ今昔物語より麻草の
 注連を木本に結廻して木本に米散し幣奉りて中臣
 祓を令讀て松立の者共を召て墨繩を掛て令伐る小
 一人の死る者無しと有が如く神の圃食させせ神
 在し坐て然る驗あり有を以て此祓詞ハ神に申
 寸祝詞なる事著明なり者よりけり
又光明寺殿の玉
薬子も同通讀申中

祓詞を中臣祓と云事古事あり此
 其名目名高し成れり故に後釋は右の玉
 葉引て此詞を唯中臣祓と云ハ其項より已
 云事ありけり抑如此様省き云ハ萬の例多し
 世人の中臣祓と云ハ此詞を即祓と心得たり
 申す詞あり中臣祓詞と倚其祓詞を申しつて解除
 正しく唱ふ可き者なり
傳十九三言小注る如く
 を行ふ状ハ先江次第春日祭條ハ神祇官居祓物
 散半一坏草人形 祝師申祝 於神前修祓之向解繩其
 一坏解繩一坏 儀台手持笏左手取繩以齒
 撫身散散示 有を台記仁平元年八月十日春日詣
 條ハ陰陽頭憲榮朝臣著座修祓 下家司官掌盛
 信沃清酒如常 至高天
 原解繩如常祓畢有成朝臣執大麻脆余前余執其木綿

換了有長朝臣深今前撤贖物と有考ふ高天
原解繩如常と云詞高天原耳振立南物止云
と有所繩を解き被詞畢少大麻を執換
事と見又平野祭次第次官主奉仕被詞と有細
書に到被清之處以人形今吻給到中臣被八張取割之
處解繩給畢官主退出進御贖物と見え八省東廊大板
次第祝師置上御并解座被物祝師著座臨被詞及八
張解繩了楔了祝師奉大麻先上御作令持祝師一撫一
吻返給了と見えたるるに到被清之處次禊
了祝師奉大麻と云時事詞被給比清給事

と有所ある可きが八省東廊の百官のあはれ大
被詞とめい平野祭と右と謂ゆ中臣祭文
の被清給事と云を云ふ可し到中臣被八張取割
之處解繩給と云詞天津管曾本所新末切切氏
八針取辟と云所を云ふ如此く被詞を讀申つ
解除の事を成し行へし迹を見水に此被詞に
神本申す詞に此詞の中謂ゆ天津祝詞の太
祝詞に有て諸神の其の感けたせ御在坐て聞
食し納受させ給ふ趣將知る可き事あるが解
繩散未の大略右如し雖も亦其流の依て等し
と有可し神宮古記に解繩者即左繩長一寸五分二

條解法以左手取解繩嚙口可解咒曰如繩繩解放如繩
 繩解放天海原尔伊吹放丘半云云有別日此其
 詞の白を抄出して唱ふるありハイデ
 其定まりの大九は有けりハイデ
 津祝詞の太祝詞を見出むと為る其章句を逐て探
 索めざら有べし故其全文を擧て論じ定む可
 くある有ける其大祝詞の段落九十有けり祝詞式
 云く六月晦大祝准之集侍親王諸王諸臣百官人
 等諸御食止宣と有ハ大祝儀百官會集被處と有
 是めて親王以下百官を位次り任は呼立るを云は是
 一段より次は天皇朝廷尔仕奉留比礼挂伴男手襪挂
 伴男勲負伴男劔佩伴男伴男能八十伴男于始官二

難波長柄朝以
 前小尊用ひて
 給い來る古文と
 思しき古文あり
 六月廿晦日於
 宮城南路大祝
 會後之と有る
 當りて

尔仕奉留人等乃過犯家難之累今年六月晦之大祝
 尔被給比清給事于諸御食止宣と有る此ハ文武百官
 男女共は呼立るもて上と同ト事ある古より云
 來り任は如此く重複云るもて是二段より次は高
 天原尔神留坐皇親神為岐神漏美乃命以比八百万神
 等于神集賜比神議二賜比我皇御孫之命比豊葦原
 乃水穗之國于安國止平久知所食止事依奉岐如此依
 志奉國中尔荒振神等比神向志向賜神掃賜比
 語向志磐根樹立草之垣景毛語止比天之磐座放天之
 八重雲于伊頭乃十別尔十別比天降依左奉支と有る

此ハ皇祖天神ノ皇御孫尊を天降レテ此国土を事依
レ授けサセ給ヘテ所ヨリ是三段多ク次々如此久依
志奉志 四方之國中登 大伴日高見之國 守安國 止 定奉
此 下津磐根 尔 宮柱太敷立高天原 尔 千木高知 尔 皇御
孫之命 乃 美頭 乃 却舍仕奉 此 天之御蔭日之御蔭 止 隱
坐 此 守國 止 平久所知食 武 國中 尔 成出 武 天之益人等
戒 過犯家難ノ罪事 汝 天津罪 止 畔放溝埋樋放類蔣串
刺生刺逆刺屎戸許ノ太久乃罪 守 天津罪 止 法別 此 氣 國
津罪 止 生膚断死膚断白人胡久美已母犯罪已子犯罪
母與子犯罪子與母犯罪畜犯罪昆虫 乃 災高津神 乃 災

高津鳥災畜 止 志 盡物為罪許ノ太久乃罪出 武 有
皇御孫尊ノ天降レセ御在レ坐テ大宮柱太敷立テ安
國ノ平久ノ所知食ノ御在レ坐テ國中ニ成出ル人
草ノ多ク成以テ行ク任レ犯セテ罪ノ多ク成ル其
を二等ニ成テ天津罪同津罪を品を分テテ事ヲ是
即解除ト云事ニ及バセ給不可行運 此 所ニ亦む有レ
是 是 四段 多ク 右ノ高天原 尔 神留坐 止 此 止 至
以テ云テ所ヨリ 其 罪 條 在 如此 解除 行 事 所
並ニ舉ルルノことを立テ為セリ 如此 出 汝 天津 官 事 以 此
大中臣天津金木 尔 本打切末打断 尔 千座置座 尔 置足
汝 志 天津 官 曾 尔 本断 断 末 断 切 尔 八針 尔 取 辟 尔 天津

祝詞乃太詔詞字宣礼と有る天津宮事ハ天宮より疾
めさせ給へり一夜の式にて解除を行ふ所作を其解
除ハ大諱辭を宣れと示させ給へり是五段あり
次ハ如此久乃良汝天津神汝天磐門字押披天ノ八
重雲字伊頭乃千別字千別字所聞食武國津神汝高山
之末短山末字上坐字高山之伊穗理短山之伊穗理字
捨別字所聞食武と有る其解除を行ひ夜詞を宣ふ事
を天神地祇の聞食させ給ふ御有状を云て此より六
段あり次ハ如此所聞食武汝皇御孫之命乃朝廷字始
天下四方國汝罪止云布罪汝不在止科戸之風乃天之

八重雲字吹放事之如久朝之御霧夕之御霧字朝風夕
風乃吹掃事之如大津邊字居大船字舳解放字解放字
大海原字押放事之如久彼方之繁木本字燒鎌乃敏鎌
以字打掃事之如久遺罪汝不在止板給比清給事字
有る天神地祇の聞食させ給へり依て罪穢の除く
少清ある事ハ迅速スシヤカなる状を譬へたり是より七段あり
次ハ高山末短山之末理與佐久那太理字落多支都速
川能瀬坐字瀬織津比咩止云神大海原字持出奈如此
持出往汝荒塩之鹽乃八百道乃八塩道之塩乃八百會
尔座須速南都比咩止云神持可吞武如此久可吞

此氣吹戸坐 須氣吹戸主 止云神根國庭之國 不氣吹放
 年如此久 氣吹放 根國庭之國 坐速佐須良比 呼止
 云神持佐須良比 失年 有是被處神等 罪穢被
 清世給ふ 神事を云る 八段あり 次は如此 久失
 此天皇我朝廷 止奉留 官官人等 年始 天下四方 被
 自今日始 罪 止云布罪 不在 止高天原 耳振立聞
 物 止馬牽立 今年六月晦日夕日之降 乃大被 被給
 此清給事 諸聞食 宣 有 初段二段の結 して玉
 卿百官 宣 所 あり 是 して 九段あり 次は 四國 下部
 等大川道 持退出 被却 宣 神祇 令 下部 為 解

除と有る是 して 御贖儀 下部 云 訖 退出 解 除 河 上
 と有る云 あり 以上 此 して 十段 あり 可 但 此 如此 此
 十段 割 め る 事 唯 其 章 を 逐 ひ て 其 句 切 を 委 曲
 境 さ む とい の 所 為 あり 必 古 然 る 事 あり 有
 故 右 の 如 く 明 ら け 以 て 行 く 天津 祝 詞 の 太 祝
 詞 云 物 を 未 捉 へ 得 ず 然 る 右 天津 金 亦 本 打
 切 未 打 断 千 座 置 座 置 足 天津 菅 曾 本 打 断
 末 打 切 八 針 取 碎 云 千 座 置 座 八 人 とい あり
 今 出 たり 板 柱 を 集 め 置 く 座 を 云 天津 菅 曾 神 樂
 酒 殿 歌 中 臣 の 天 小 菅 を 割 被 云 云 云 物 あり
 儀式 謂 曰 大 麻 是 あり 斯 け 右 板 の 事 を 行

天津金不ハ伯
 家古記及神宮
 古傳ハ事科と云
 ハ天津菅曾
 ハ四年科と云ハ袖
 中板十七ハ菅と
 麻多由注せり
 此を以て金木を
 以て被串と一
 具ハ菅麻の二
 を合て謂ゆ
 割掃と爲る
 事あり即

ふ文あり又儀式は此場を祓所と有り傳十四百云
るが如く此四神を祓戸神と云はれ其神を勸請奉
る事著きを中古の歌に河社と云ふを其神の御座
ありけはれ全く神事ありて中臣宣祝詞と云ふ
上二百引る神祇令に以告神祝詞宣聞百官と云ふ
同し事あり其詞を別たれずして祭と政とを一
行はれしありけり然はれ愈以て天津祝詞の太祝詞
いし此祝詞の中は收つてあり右の文は次て天
津祝詞乃太祝詞事^字宣礼と別れ詞有り其を宣れ
と中臣をいへ玉御百官に令宣給へる如くありと

其の讀法の委しき者にて此の上は高天原^ル
神留坐皇親神漏岐神漏美乃命^以はより係はる事知
るはあり其故は如此出^波天津宮事^以は云ふこと
天宮の事務は古語拾遺に如天上儀と云ふ一事ふ
れは天神の御座に坐す^誰て唯^誰は然命^{カホ}せらる可き
又次は如此久乃良^波天津神^波云ふは所聞食武^國津
神^波云ふは所聞食武^武と云ふ事は然計りあり推量言を
誰り^ハ云ふ可き其正は然有る状を^ハ憶ふ見認り所
知食す天神の御言ふる事申すも更なり然はれ此の
天津祝詞乃太祝詞事^字宣礼と右二百引る詞^波

中此時神集ハル
 一八百方神中神在
 坐レレハ彼皇祖天
 神ノ命ヲ天兒屋命
 宣稱セテ給ヘテ
 正一天津祝詞ハ天
 祖事トシテ此上ノ体
 九テ其神等ノ物を
 津祝詞中ノ水神紀
 壇山堀川某字持出鐘
 以事教習給文ナリ
 目格ニ文ニ其神ハ
 為レ其神ノ為レ
 其源穢を極清ル
 根國底國ノ行南ニ
 行南を宣シ續ケテ
 少シ者ニ有レ
 然レハ

落多支都速川能瀬坐須瀬織津比咩止云神大海原
 持出武奈如此持出往荒塩之塩乃八百道乃八塩道之
 塩乃八百會座須速南都比咩止云神持可吞吞
 此久可吞吞氣吹戸坐須氣吹戸主止云神根國底之
 國氣吹放氏如此久氣吹放氏根國底之國坐速佐
 須良比咩登云神根國底之國持佐須良比失年有
 此此文多其人當可然之此四柱神中古
 乃板戸神ト申奉ル之傳説有レ也此詞傳ハ
 其神事を成一行ハ世世御在坐中状を如何ハ知
 奉ル心甚如此ノ奇異ノ靈ノ妙多事を正月

小視奉ル如く委曲ニ傳ヘサセ給ヘル即天神
 御言ニ出テ謂フ天津祝詞ハ太祝詞言多者ナリ
 けり世人ノ心も詞も及バコト有レ其思慮ノ至
 ざりけり妙處ノ眼を著テ考ふレハ此を除テ其ト指
 云レテ者多む亦レけり備此ハ板戸神等ノ源穢を清
 めサセ給ヘル天神地祇ノ悉ク聞食レル上ノ事
 多ク故ニ此ハ太祝詞を收ルル水々者多ク由
 又上文ニ照應セテ知テ可ク多ク若ク此板戸神等
 御事ハ已ニ傳十三百四十二下詳ク説明ス奉ルハ
 今云限ハ亦多ク雖も此文ニ就テ其次第を云ヒル

瀬織津比咩神ハ被物ヲ負せて流し遣たる眾穢を先
受取給ひて速川より下し大海に送出し給ふ神
坐り速南都比咩神ハ塩の八百會と云て方より潮道
より流來る潮の一處ニ集會て海底へ巻波るる所
御在り坐り根国底國に送遣ハし給ふ神坐り師説
其八百會ハ謂由る速吸名門ありと云れたる實
然る言より氣吹戸主神ハ其眾穢を氣吹放ち遣給ふ
處の限を廣く云るより被物を川に流し棄る所より
して終り根国に至る迄は廣く亘る神名より其意の
如くある神功坐り神より速佐須良比咩神ハ其根國

御在り坐り顯國より送至る所の眾穢を流離る
失給ふ神坐り右の如く此四柱神の御力を合せ御
在り坐り政ごし給ふ事より妙ありとも妙あり神
事ある御在り坐り此天津祝詞の太祝詞事を神
告げ奉り人々聞知しむるを解除を行ひて被詞を
宣る所以よりけり 或者此被戸神等ハ御事を驛路の
謂由る多支都速川の瀬織津比咩神ハ速南都比咩神ハ
驛處より其瀬織津比咩神ハ速南都比咩神ハ
共ニ其驛より驛長あり若て其謂由る氣吹戸と云る
驛使の発出する所根国底國ハ其驛使の天神地祇の
御命を負持りて至り坐り所より被氣吹戸主神ハ
即驛使はより其驛使たる神の眾穢と云ふ荷物
領して根国底國へ至る速川の瀬織津比咩神ハ其驛長瀬
織津比咩神ハ仰せて眾穢の荷物を運ぶ輪さし給ふ

の八百會して其驛長連用都此咩神も負せて其原
穢の荷物を取回庭園に運ぶ輪は若て其驛使氣
吹戸主神の始終右の原穢の荷物を護送し致して彼
土に於て其原穢の荷物を主として受取る役人速
佐須良比咩神其を得て取捌くか即佐須良比失ふ
しと云ふは鈴屋大人の後釋に説かれたる義を近く譬
へ論せざるは理 但右の天津祝詞の太祝詞ハ其
甚能聞えたり 大板詞の中は取て連ぬ云ふが故に右の如く取放る
てハ文を成ざらるか如く思ふ輩も有ふれども上
下引る鎮火道饗又太神宮月次神嘗等祭詞ハ更ふ
り大殿祭詞も天津奇護言ふども此如く其天
津祝詞と云限を別し取放りてハ同トく事の足ざら
か如きは其神語の天津祝詞をしも文中に列ね載る

よハ上下の係合せて相協ふか如く文を成せざるが故
より今此抄出たるは其趣に隨ひて少く前後の言を
加へて試みる言も得難く奇しく歎ふる所有て不足
の事無きと思ふは此素戔鳴尊の千座置戸を料せ
る水の時天兒屋命其解除之太諱辭を掌りて宣へ
傳へたるを即其詞に有べきを皇御孫尊の御天
降の後高千穂宮に於て此大板詞の定る時右の
天津祝詞の太祝詞をしも此詞の中は取めて御せ
るに傳來の如くは此外に別な天津祝詞の太祝詞と
云物も殊更なる所ありけり後釋に此に云ふ太祝

大板詞の中臣の宣と云ふ親王以下の人を告るを云
ふと有る如く上下共に通はし云言ふ其ハ古事
記者櫻宮段の故到幸大坂山口之時遇一女人其女人
白之略尔天皇歌曰游富佐迦^{大坂}迹阿布夜袁登賣袁美知^道
斗南^向多陀迹波能良受富^{不宣}藝^{富麻道}府知袁能流^宣と有る此ハ
天皇の申す事を能流と歌へせ給へるなり又万葉一
七天皇御製歌曰此岳尔菜採須見家告同名告汝根と
有る此も下より上へ令申給ふ事を告へ告されとも
詠七給へる下此等例猶教知ず多事なり又記
傳の説の書紀曰太諱辞を書る諱字説文の告曉之熟

也と云る意あり久度久と云言ハ此諱説言の意ハ近
し俊頼朝臣歌曰初無罪の積りの悲しさを叩頭の
声ニ諱説きつゝ哉と有と云此れも如し傳二十一
下百九 神祝祝之下の註る如く神祝きと祝くと云
ハ諱返しつゝ其事を重ね行ふを云り此を以て其下
寧^{カヘ}友^シ復^シハ太諱辞を宣給ひし御事を知べし又其所
ハ如く万葉十三卷六下久礼久礼登と云語有る其
ハ毛詩曰諱を然訓る同トく俗にも呉こ云る
是より右の諱を註し詳熟也朱子云詳語之類と見
之廣韻にも諱告之下寧者也と有る以て此は用ひ
水に不意をと思ふ可し然れハ後釋は迦世ハ神通者
と云者ハ所作を見らば法師の佛を齋く事を羨やと
習ひて行ふ事多し其中此大板祝詞を讀む事
も彼佛の経陀羅多し云物を讀むは習ひて或ハ神

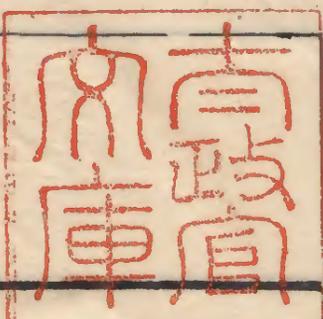
御前日向ひて讀ニ或ハ教百遍ニ讀ニ或ハ五千度一
 万度ニ被ル云事有ク此を讀むを被修行と云ハ云
 二ニ近世ノ流弊を正されたる實ニ然ル言ハ其
 五千度一万度ニ云ハ餘ハ事ありけり已ニ
 傳ハ一ニ卷百十二ニ丁ニ中ニ臣ノ壽ノ詞ノ及リ石ノ本ノ後ノ記ノを引テ云
 有ク知ル終ニ天ノ都ノ詔ノ戸ノ乃リ太ノ詔ノ戸ノ言ノ遠ニ以テ出テ告テ礼ト
 給テ有ク黄ノ帝ノ予リ平ノ明ノ又ニ至ル迄ニ告テ水ノと仰テ諭サセ
 給テ有ク其ノ事ノ應ルを限ニ申テ事ト云ハり
 ハ都加佐杼流ト訓ム其都加佐ハ古語拾遺ニ供奉
 其職ト所見タル職ヲ云ハ杼流ハ執リて古事記ニ取
 持テ前ニ事ヲ為シ政ト執リ食ノ司ノ之ノ政ヲ以テ白テ賜ル有ク是ナり
 下章第二ニ書ニ即チ熱田祝部所掌ノ之神ニ是也見テ天
 孫降臨章第二ニ書ニ且チ天兒屋命主ノ神事ノ之ノ宗源ノ者
 也故俾テ以テ太占ノ卜ノ事ヲ而シ奉テ仕マス有ク主ノ字ヲ書レ

山内向天皇二年神代
 八十五卷此卷之我
 下其二字を白世割れ又

古事記海宮段ニハ吾掌ヲ水ト有リ又密仁天皇御記三
 十九年ニ是後命ニ五十瓊敷命ニ俾テ主シ石上神宮ノ之神宝ト
 有ク其一云ハ是時神ノ之ノ言ニ春日臣族名市河令治因
 以命市河令治ト有リ其八十七年ニ五十瓊敷命ニ謂テ妹
 大中姬曰我老也ニ不能掌ヲ神宝ト自今以後必汝ニ主シ焉ト大
 姬命辞曰ハ然ル遂チ大中姬命授物部十市根大連而令治
 故物部連等ニ于今治石上神宝ニ是其縁也ト有ク掌ト
 主ト之ノ字ヲ通ハ一ニ用ヒ之レ又チ其ヲ治メ換テ書サレ
 たる状を思ひ直シ考ム可ク者ナリハ是其事ヲ
 云ハ其物ヲ治メ謂テ証ス職員令テ各々其ノ職ヲ証ス
 されたる所ニ何レハ掌ト集ト有ク即チ治メ集ト云ハ

等一者より猶都加佐ハ供長なる由傳二十三卷吾
見宮首と有る下百十丁云べし又執事ノ義
ハ傳十九卷百九十八丁中臣連ノ中臣ハ
中執臣ノ義なるを説く其下云り此ハ使天兒
屋命掌其解除之太諱辭而宣之と有る起りて其解除
ノ事ハ世々其家ノ仕奉る職掌と成り古語拾遺神
武天皇改日令天種子命天兒屋命之孫解除天孫國眾事所謂
天眾者上既記訖國眾者國中人民所祀之眾其事具在
中臣禊詞と有る是より所以と上二百十六丁ノ註二が如く
彼大板詞を此ノ始と中臣禊詞と出たりと起りて西
宮記左經記云々然見え朝野群載云々中臣祭文太
神宮建久行事記云々祭中臣祭文云々有る又江次第玉葉

等云々唯中臣被と有る言ハ略したるあるか天下
の大板詞を即中臣被詞と云ふ其氏人ノ掌と所と
してて他氏云々且云々事云々故あり若て已と引
る神祇令と中臣宣祝詞と部と為解除と有る其より以
來中臣と部相並びて仕奉る事ハ何れノ御時より
事より詳云々雖も下部ハ清和天皇實錄云々貞觀
五年九月七日丙申壹岐島石田郡人宮主外從五位下
下部是雄神祇權少史正七位上下部業孝等賜姓伊伎
宿祢其先出自雷大臣命也と有る其雷大臣命ハ姓氏
録云々天兒屋根命十一世孫と有るハ中臣ノ支流云々



を以て其本職と有る事の外は解除の事を以て兼て
 仕奉るゝもの給へりし事ありし此より又轉りて中頃
 にて成てハ解除と成りて云へハ陰陽師の爲に所作の如
 く成りし中臣の職を上部に轉せしより再轉り
 下陰陽師の物に如く成竟たる者ありけり
 其右
 下引る紫式部日記に陰陽師共廿二人在り限り召集
 めに凡そ百万神の耳振立ぬハ此に云るハ彼中臣
 祭文を讀む事を云ふなり兵範記に仁安二年十月十五
 日己酉天晴卯刻參院被亮蓮十二社奉幣云々陰陽頭
 有憲朝臣著座中座次使殿上人十二人著座次御被云
 仁安二年八月十七日春日詣陰陽頭憲
 榮朝臣著座御被云々有ハ朝廷に詣り給へり給
 不大被の外に院中にて雖も内々行ハ給へり給
 陰陽師の爲に給へり給其余家に於て所作の件に
 行ふ被り詞に中臣被詞を用ひ給ふ所作の件に

南政官
 清印
 入庫

